

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K03278

研究課題名(和文) 青年期の感情制御、感情の社会化およびうつ症状の変遷に関する発達精神病理学的研究

研究課題名(英文) The developmental trajectory of depressive symptoms and its longitudinal association with emotional regulation and socialization in adolescence: 10-year trajectory by cohort sequential design

研究代表者

出野 美那子 (Deno, Minako)

武蔵野大学・人間科学部・准教授

研究者番号：30583918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、青年期における、第二性徴、認知能力、社会的関係と、感情制御の発達に関連およびうつ症状へ及ぼす相互作用的影響について、後期児童期から青年期後期への繋がりを縦断研究により検討することであった。これまでの成果により、親・友人からの感情の社会化尺度の作成を行い、怒り表出の方略および対象の区別の年齢差および性差を明らかにした。さらに感情の肯定的再評価の発達軌跡を見出し、親・友人との感情の認知的制御についての話し合いと肯定的再評価との縦断的関連を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

児童期後期から青年期後期という幅広い年齢層を対象としたことにより、いわゆるブラックボックスとなっている青年期の感情とうつ症状の発達について貴重なデータが得られた。うつ症状や肯定的再評価の発達の軌跡を明らかにし、発達の流れの中における社会的環境の影響について明らかにすることは、臨床心理学的援助に対する直接的な示唆を与えるものであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the development trajectory of depressive symptoms and positive reappraisal and the relationship with emotional socialization by 5-wave annual cohort-sequential design in adolescence. The study recruited 655 adolescents who were in the fourth year of elementary school, first year of junior high school, and first year of high school during the first wave.

This study found that the frequency of positive reappraisal rapidly increased during early and middle adolescence and plateaued in late adolescence and that emotional talk with parents and peers had the positive effects on this reappraisal.

研究分野：臨床心理学

キーワード：感情制御 感情の社会化 うつ症状 怒り表出行動 青年期

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

青年期において、感情制御はうつ症状の形成や変遷に重要な役割を担っていると考えられる。青年期には、大うつ病の発現が児童期の2倍になる (Pine et al., 1998) など、この時期特有の傾向が認められる。また、青年期の抑うつとの併存疾患や青年期発症の抑うつ病の予後の悪さ (e.g., Mash & Wolfe, 2015) など、この時期のうつ症状の様相は、成人期以降の適応においても重要な役割を担っていると考えられる。しかし青年期については、成人期と児童期の狭間で未だ実証的研究は少ないのが現状である。

うつ症状への影響要因として、本研究では、特に近年注目の集まる感情制御の認知的方略と表出行動を取り上げる。両者はうつ症状の憎悪へ強く影響することが、主に成人を対象として認められている。例えば、ネガティブな出来事のよい側面を考えない傾向や反芻して思い返すなどの認知的傾向 (Garnefski & Kraaij, 2007; 榊原, 2015)、言語的・身体的攻撃を含む怒りの表出 (e.g., Spielberger, 1988)、怒りの抑制 (Gross & John, 2003) はうつを強めることが見出されている。

感情制御の影響要因については、性差、学年差などの発達の視点を含めることの難しさからか (e.g., Chaplin & Aldao, 2013)、注目度の高さに比して、後期児童期から青年期を対象とした研究が非常に少ない (Tobin & Graziano, 2006)。青年期は第二性徴に加えて、感情や衝動に関わる扁桃体や線条体が発達する一方で、認知/衝動性制御に関わる前頭前野は未発達なままであるという不均衡状態が起きるため、感情制御や衝動の制御が難しく、社会的刺激に影響されやすい (Shulman et al., 2016)。そのため、学校や友人関係、異性との関係など社会的関わりが格段に広がる青年期においては、感情制御と社会的環境の相互作用 (感情の社会化) が非常に重視される (e.g., Steinberg, et al., 2006)。児童期における感情制御の認知的方略が、成人期とどのように異なるのか、どのように分化していくのか、どのような社会的関わりが認知的方略の分化や表出行動に影響するのかについて、検討が待たれている状態である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、青年期における、第二性徴、認知能力、社会的関係と、感情制御の発達の関連およびうつ症状へ及ぼす相互作用的影響について、縦断研究により検討することであった。本研究では特別研究員奨励費助成の対象であった三コホートを追跡、計五時点の縦断的研究を行い、後期児童期から青年期後期への繋がり網羅的な検討を行った。(なお本研究費では、特別研究員奨励費助成で郵送できなかった者を対象としたこと、および特別研究員奨励費助成の終了後の追跡を行ったことから、研究費の競合は起こらないことを申し添える)

3. 研究の方法

(1) 調査方法と調査対象

2017年11-12月に市場調査会社に登録している全国のモニターから、コホート系列デザインにより、小学4、中学1、高校1年生の子どもを持つ母親を抽出し、1年間隔で2021年12月まで計5回、子ども用と母親用の自記式質問紙を郵送した。1時点目の回答者は655組 (順に216名、208名、231名、男子320名、女子335名、 $M_{age}=12.8\pm 2.5$) であった (Figure1)。なお高校卒業後の進路は、大学、短大、専門学校、大学進学予備校、就職など様々であったが、本研究では便宜的に、高校卒業1年目、2年目をそれぞれ大学1年、大学2年と表記した。本研究は、東京大学倫理審査専門委員会の承認を受けて実施



Figure1 調査時点と対象者の学年

した (No. 17-122, 17-179, 18-192, 19-160)。

(2) 調査内容

□子どもと保護者に対し、それぞれ以下の内容について尋ねた。子どもに対しては、親・友人に対する怒り表出行動、感情制御の認知的方略、親・友人による感情の社会化などであった。保護者に対しては、子どもの怒り表出行動など、保護者自身の感情の社会化、養育態度などであった。

4. 研究成果

これまでの成果により、主に4点について明らかにすることができた。以下に概要を述べる。

(1) 親・友人からの感情の社会化尺度の作成

青年期の子どもの感情表出に対する親の反応 (感情の社会化) に関する尺度 (The Emotions as a Child Scale: EAC; 怒り因子のみ) 日本語版の作成を目的とした。研究1では、1時点目に回答した青年655名を対象に、尺度の因子的妥当性と予測的妥当性の確認を行なった。研究2では、コミュニティサンプルである小学4-6年、中学3年生406名を対象に、尺度の再検査信頼性および基準関連妥当性の検討を行なった。研究1,2の結果より、妥当性と信頼性が認められ、青年期における親および友人からの感情の社会化尺度日本語版が作成された。

(2) 怒り表出の方略と対人的文脈の区別に関する年齢差および性差の検討

1時点目に回答した小学4年、中学1年、高校1年生655名を対象に、怒り表出方略の頻度、対人的文脈 (親・友人) によって怒り表出方略が異なるかを検討した。建設的方略の頻度に、性差学年差は見られず、後期児童期にはある程度獲得されている方略であることが示唆された。対人的文脈による怒り表出の区別 (学年差) は女子のみに見られ、方略の区別 (学年差) は男子のみに見られた。そのため後期児童期から青年期にかけての怒り表出方略の発達の軌跡に、性差が存在する可能性が示唆された。

(3) 環境感受性の個人差による第二次的徴と抑うつ症状との関係

本研究では、第二次的徴と抑うつとの関係が、子どもの環境感受性 (内外の環境刺激からの影響の受けやすさ) の個人差に応じて、どのように変化しうるかを検討した。1~3時点目までの縦断データを用いて分析を行った結果、男子では12~13歳にかけて身体的な成長スピードが速く、環境感受性が高いほど、抑うつ症状が低いことが示された。女子ではこうした環境感受性の調整効果は確認されなかった。限定的ではあるが、これらの結果は、身体的な変化による影響の受けやすさには個人差があり、それに依って良くも悪くも抑うつ症状が現れる程度が変わりうることを示唆している。

(4) 肯定的再評価の発達軌跡および親・友人との肯定的再評価に関する話し合いとの縦断的関連

2時点以上回答した子ども294名を分析対象とした。成長曲線モデルにより、児童期後期から青年期後期における肯定的再評価使用頻度の平均的な発達の軌跡を検討したところ、青年期前期には直線的に上昇、中期にはなだらかに増加、後期には増加が落ち着いてプラトーとなる軌跡を描くことが明らかとなった。また親・友人との感情の認知的制御についての話し合いが、肯定的再評価へ影響することが見出された。3コホートをまとめて11時点の縦断データとしたランダム交差遅延モデルにより、親・友人との肯定的再評価に関する話し合いと肯定的再評価使用頻度との縦断的関連を検討した (Figure2)。本モデルにより、個人間分散 (時点に共通した特性) と個

人内分散 (各時点の変数間の縦断的関連) を切り分けて検討することができる。この方法により、11 時点の共通項としての親・友人との話し合い特性と肯定的再評価特性との関連が検討でき、かつ個人内の各時点の親・友人との話し合いの程度と肯定的再評価の程度の縦断的関連を検討できる。その結果、11 時点に共通の特性として、親・友人との話し合い特性は肯定的再評価特性と正の関係を有していた。各時点の縦断的関係としては、友人との話し合いのみが肯定的再評価に正の関連を有していた。

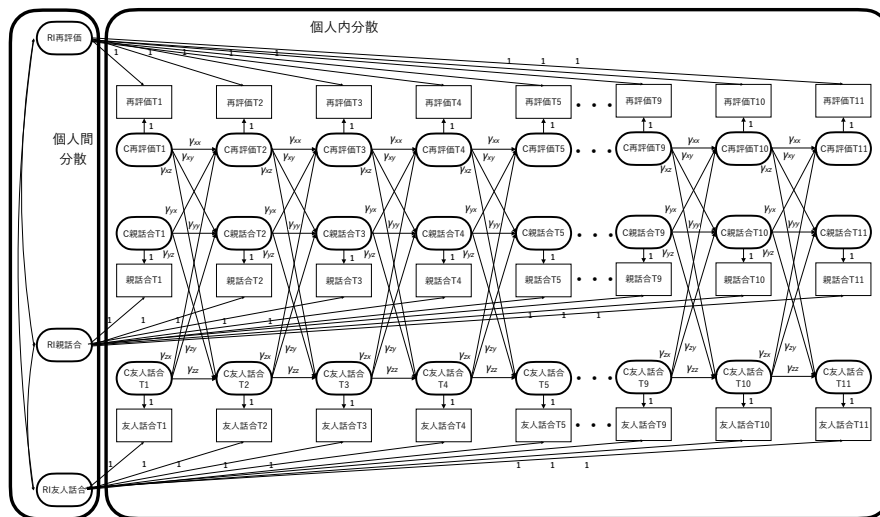


Figure2 ランダム切片交差遅延モデルによる肯定的再評価と親・友人との話し合いの関連 (RI: Random intercept, ランダム切片 (11 時点に共通の特性); C: Centered, 中心化された潜在変数 (個人内の各時点の傾向). 誤差分散, 誤差間相関は省略. 性別から肯定的再評価特性, 親・友人との話し合い特性へのパスは省略. 6 時点目から 8 時点目については省略.)

以上の成果から、社会的環境として親・友人の感情の社会化の把握が可能になり、怒り表出の方略差および対人的文脈の差、社会的環境と感情の認知的制御 (肯定的再評価) との縦断的関連が明らかとなった。コホート系列デザインを用いることによって、縦断的調査の難しい児童期後期から青年期の 10 年を追跡することができ、感情にまつわる能力の発達とその影響要因について検討することができたことは、今後の子どもの精神保健、心理社会的支援に関するプログラムを策定する上で示唆に富む知見であると言えよう。

一方、本研究では量的分析を行ったため、児童期以前と青年期以降の肯定的再評価の質的差異については未検討であり、また、うつ症状の発達の変遷、うつ症状と怒りの関係についても未検討となった。さらに、より発展した分析のためには、調査対象者数、調査回数を増やす必要があり、今後の課題として残された。以上の成果は、中間報告段階のものであり、最終的な研究結果の詳細については査読中、準備中の学会発表および論文をご参照頂きたい。

【引用文献】

Chaplin, T. M. & Aldao, A. (2013). Gender differences in emotion expression in children: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 139, 735–765.

Garnefski, N., & Kraaij, V. (2007). The Cognitive Emotion Regulation Questionnaire; Psychometric Features and Prospective Relationships with Depression and Anxiety in Adults. *European Journal of Psychological Assessment*, 23(3), 141–149.

Gross, J. J., & John, O. P. (2003). Individual differences in two emotion regulation processes: Implications

- for affect, relationships, and well-being. *Journal of Personality & Social Psychology*, 85, 348–362.
- Mash, E. J., & Wolfe, D. A. (2015). *Abnormal Child Psychology (6th ed)*. Boston: Cengage Learning.
- Pine D. S., Cohen, P., Gurley, D., Brook, J., & Ma, Y. (1998). The Risk for Early-Adulthood Anxiety and Depressive Disorders in Adolescents with Anxiety and Depressive Disorders. *Archives of general psychiatry*, 55(1), 56-64.
- 榎原良太. (2015). 認知的感情制御方略の使用傾向及び精神的健康との関連: 日本語版 Cognitive Emotion Regulation Questionnaire(CERQ)の作成及びネガティブ感情強度への着目を通して. *感情心理学研究*, 23, 46-58.
- Shulman, E. P., Smith, A. R., Silva, K., Icenogle, G., Duell, N., Chein, J., & Steinberg, L. (2016). The dual systems model: Review, reappraisal, and reaffirmation. *Developmental cognitive neuroscience*, 17, 103–117.
- Spielberger, C. D. (1988). *Manual for the State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI)*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Steinberg, L., Dahl, R., Keating, D., Kupfer, D. J., Masten, A. S., & Pine, D. S. (2006). The study of developmental psychopathology in adolescence: Integrating affective neuroscience with the study of context. In D. Cicchetti & D. J. Cohen (Eds.), *Developmental psychopathology, Vol 2: Developmental neuroscience (2nd ed.)* (pp.710–741). Hoboken, NJ: Wiley.
- Tobin, R. M., & Graziano, W. G. (2006). Development of regulatory processes through adolescence: A review of recent empirical studies. In D. K. Mroczek & T. D. Little (Ed.), *Handbook of personality development* (pp.263-283). New York and London: Psychology Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Iimura Shuhei, Deno Minako, Kibe Chieko, Endo Toshihiko	4. 巻 -
2. 論文標題 Beyond the diathesis stress paradigm: Effect of the environmental sensitivity x pubertal tempo interaction on depressive symptoms	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 New Directions for Child and Adolescent Development	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/cad.20456	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Deno Minako, Iimura Shuhei, Endo Toshihiko	4. 巻 -
2. 論文標題 Reliability and validity of the Emotions as a Child Scale in Japanese children and adolescents: Focusing on children's anger	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-021-02136-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Deno Minako, Yamagata, Shinji, Silvers, Jennifer, A., Tonegawa, Akiko, Endo Toshihiko	4. 巻 13(2)
2. 論文標題 Age and sex differences in the differentiation of anger expression strategies and interpersonal contexts among Japanese adolescents.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Emotional Education	6. 最初と最後の頁 40-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 出野美那子	4. 巻 21
2. 論文標題 青年期の感情コンピテンスの発達における社会的文脈の役割: 文献的研究.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 武蔵野大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 26-32.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石川恵太、東菜摘子、大賀真伊、滝沢龍.	4. 巻 -
2. 論文標題 親の小児期逆境体験が次世代の精神病理に与える影響に関する研究の現状と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本里奈・松本珠美・石川智子・下田茉莉子・金里紗・西野悠太・滝沢龍.	4. 巻 45
2. 論文標題 対人関係が心身の健康に及ぼす影響に関するバイオマーカー研究の概観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要	6. 最初と最後の頁 89-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Azuma, N., & Takizawa, R.
2. 発表標題 The impact of adverse childhood experiences on building resilience in young adulthood: the role of perceived social support by gender in Japan.
3. 学会等名 20th WPA World Congress of Psychiatry, Virtual Congress. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 出野美那子, 飯村周平, 遠藤利彦.
2. 発表標題 青年期における友人からの感情の社会化尺度日本語版の作成.
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会ポスター発表, Web開催.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯村周平, 出野美那子, 岐部智恵子, 遠藤利彦.
2. 発表標題 青年期の感情制御の発達と適応に関する縦断調査2020 (1): 差次感受性理論にもとづく抑うつ症状の発達の個人差メカニズムの検討.
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会ポスター発表, Web開催.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 則近千尋, 出野美那子, 遠藤利彦.
2. 発表標題 青年期の感情制御の発達と適応に関する縦断調査2020 (2): 子どもの怒り表出に対する親の反応・働きかけの学校段階での差異の検討.
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会ポスター発表, Web開催.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 利根川明子, 出野美那子, 遠藤利彦.
2. 発表標題 青年期の感情制御の発達と適応に関する縦断調査2020 (3): 子どもの感情特性と教師からの感情サポートの知覚の相互関係の検討.
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会ポスター発表, Web開催.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 出野美那子, 利根川明子, 飯村周平, 遠藤利彦.
2. 発表標題 青年期の感情制御の発達と適応に関する縦断調査2020 (4): 親, 友人からの感情の社会化と子どもの認知的感情制御の相互的影響に関する予備的検討.
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会ポスター発表, Web開催.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 出野美那子・飯村周平.
2. 発表標題 青年期の感情の社会化尺度日本語版作成の試み: 信頼性, 因子的妥当性および予測的妥当性の検討.
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会, ポスター発表, 2020.3.2. 大阪.
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山形 伸二 (Yamagata Shinji) (60625193)	名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	滝沢 龍 (Takizawa Ryu) (30420243)	東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・准教授 (12601)	
研究分担者	飯村 周平 (Iimura Shuhei) (80862002)	東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・特別研究員 (12601)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	利根川 明子 (Tonegawa Akiko)	国立教育政策研究所・生徒指導・進路指導研究センター (併)幼児教育研究センター・研究員 (62601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大久保 圭介 (Okubo Keisuke)	東京大学・発達保育実践政策学センター・特任助教 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	University of California, Los Angeles.		